

春日部福音自由教会 2020年6月28日 11:00 同時配信礼拝（ライブ配信礼拝）

聖書 新約聖書 マルコの福音書7章31節～37節

説教 「開け！」 小野信一牧師

おはようございます。6月28日の日曜日の礼拝を共にささげます。今日まで、同時配信礼拝を行いますということでYouTubeを用いて、同時に音声と映像を送り、それを家やそれぞれの場所で受信しながら同時に礼拝をささげるということを続けて参りました。

今日はマルコの福音書7章31節から37節までが朗読されています。

I 祈り

お祈りをささげましょう。

天の父なる神様。変わる事のない真実なるあなたの御名を崇めます。神様、あなたは私たちのいのちを見守り、私たちの歩みを見守り、また支え導いてくださるお方です。今日もあなたが私たちを招き呼び集めてくださいます。今いる場所はそれぞれですが、あなたの招きの中に共に置かれています。今一緒にあなたの前に出ています。一人一人がささげる、からだと心からの讃美と礼拝をお受けくださいますように。今御言葉が開かれました。今朝も主イエス様の御声を聞かせてくださいますように。主イエスキリストの御名によってお祈りします。 アーメン

II 集まる礼拝に向けて

今日は6月の終わりの日曜日です。いろんなことが予定通りには行きません。皆さんはどうでしょうか。私はですね、今年はサバティカルという研修休暇を頂く予定になっていました。6月の後半から7月の前半までですが、今頃はイギリスからギリシャに行って、テサロニケそしてアテネ、パウロの足跡を訪ねていた、予定でした。でも行くことは出来ませんでした。ここにおります。皆さんも毎週礼拝堂に来て礼拝をささげることが当たり前であった。それが出来ないということになって、特に4月19日から今日に至るまで家に留まって礼拝をささげることが起こりました。学校でも会社でも予定通りには行きません。前とは違います。そしてこれからの予定も立つような立たないような、きちんとは立てられないという状況の中にあります。プロ野球は始まりましたけれども無観客で行われています。

今日6月28日を同時配信礼拝最後の日としています。来週7月5日から三会堂での礼拝を再開します。来られる方はどうぞ皆お出で下さい。しかし、無理をなさらずに、家で礼拝をささげていただくことも可能です。基本的には三つの所に集まって礼拝をするということですが、礼拝の同時配信は続けて行いますので、来週からも家に留まって礼拝をささげることできます。また礼拝再開に伴って、一部の中央のメンバーには、丘の上の礼拝、あるいは庄和の礼拝に出席することを検討いただければ、という風にも思います。今回週報にも掲載しました、金曜日に送った、少し長いメールになりましたけれども、教会の皆さんへのお知らせをよくお読みいただければ感謝です。

集まる礼拝をしないことにして、同時配信礼拝としたのは何故だったのでしょうか。もう一

度振り返りますと、何よりも感染を防止する、そして医療の崩壊を防ぐため、助かるいのちが助からなくなるということを防ぐためでした。互いのいのちを守る、そのことのために社会の一員として私たちも行動を変えるということ、礼拝は止めない、しかし集まらない。集まらないで礼拝をささげる、ささげ続ける。そのための方法を模索して進んできました。集まらない礼拝をするためになされた兄弟姉妹の努力、協力を感謝したいと思います。特に配信のための奉仕者、また YouTube 同時配信を見られない方の為に、様々な形でなされた奉仕に感謝を致します。これからは集まり始めていきます。しかし状況を見てまた戻る、戻すこともあります。少しずつ慎重に進めたいと思います。

2月29日の、3月1日の礼拝に向けての最初のメールの発信でお伝えしたように、普段平日の生活の中で、会社、学校、地域の様々な集団に属しているメンバーたちが、主日に礼拝堂に一堂に会し、再び平日に各集団に戻って行く。それが教会員の行動のパターンですから、良いものも悪いものも、社会から持ち込み得るし、同様に教会から社会に運び得るわけです。礼拝に出席するお互いが、自分も感染者である可能性がないわけではない、と自覚しつつ、感染源にならないように気を付けましょう。ことに礼拝の場や教会の会堂が感染の場とならないように気を付けなければなりません。

これからも、自分も運び得る、自分も受取り得るという可能性を自覚して、たとえ一緒にいる自分か相手かどちらかが持っていたとしても、受け取るべきでないものは受け取らない、手渡さない、ということに気をつけながら行動しましょう。

反対に良いものは分け合いましょう。恵みを分け合いましょう。重荷を負い合いましょう。助け合い、担い合いましょう。共に喜び、共に泣き、共に祈りましょう。希望を、そして、いのちの言葉を伝えましょう。分け合いましょう。そして誰かに渡していきましょう。

III 開け！ イエスの奇跡

今日の御言葉はマルコの福音書の続きです。7章31節から37節まで。中心は、34節、イエス様の言葉です。「エパタ」「開け」というイエス様の声が響きます。開け、開かれよ、というのです。最初に33節のところに「その人だけを連れ出し」と書いてあります。そこに目を留めたいと思います。イエス様は一人を呼び、一人を連れ出して、1対1で向き合いました。そして何をしたんでしょうか。指を両耳に入れ、それから唾をつけてその舌に触られたっていうのです。何でこんなことをしたんだろうって、前にもここを読むとと思っていました。耳に、両耳に指を入れる。それから唾をつけて舌に触るっていうんですから、不思議なことですね。不思議な行動だと思います。そして、今これを読むと、何という濃厚接触者というか、だな、と思います。イエス様凄いことしたんだなと思います。私たちこんなに濃厚にイエス様と接触しているかな、してもらってるかな、と考えさせられる場面です。

この前の7章14節の所では、「イエスは再び群衆を呼び寄せて」とありました。そして言われました。「みな、わたしに聞きなさい。悟りなさい」。三会堂礼拝再開に当たって、もう一度耳を傾けたい言葉です。イエスは再び群衆を呼び寄せた。みな来なさい。みな、わたしに聞きなさい、と言われたのですね。

でも今日のこの場面では、みなではないんです。群衆ではないのです。群衆の中からその

人だけを連れ出し、一人と一人で向き合ったのです。二人だけの時を持ちました。二人だけの時、場所で、イエス様が特別な形で、その手で、指で触れてくださる。そして声を掛けました。天を見上げて、大きく深い息を吸い、声を発します。「エパタ。開け」と、そう言われたのです。

私たちには、イエス様のもとに、共に集まることと、そしてもう一つ、一人になって、イエス様と二人だけになって触れていただく時と、両方が必要なのです。今日の御言葉は、イエス様が私たち一人一人を呼び出して、一人に触れてくださる。私しかいない、イエス様と私しかいない、そういう場所に、イエス様が呼びだし、連れ出してくださる。私も呼ばれている。私のこともイエス様は連れ出してくださる。そのように読み、また聞く場面であります。

デカポリスという地方、10の町と呼ばれる異邦人の地域を、イエス様は歩いて行かれました。そこを通過して、おそらくいつもの反対側と思えますけれども、湖の方へ行かれた。その時人々が一人の人を連れてきます。そしてイエス様にお願いします。その時のことです。イエス様がみんながいる所から一人を連れ出して、両耳に指を入れて、唾をした指でその舌に触られたというのです。そして、「エパタ」と声を出された。すると何が起こったのでしょうか。35節「すると、すぐに彼の耳が開き、下のもつれが解け、はっきりと話せるようになった」というのです。「彼は耳が聞こえず、口のきけない人」であったと、32節に書いてあります。「すると耳が開き」。彼の耳は開いたのです。反対に言えば、彼の耳は閉じていたのです。耳の閉じた人の耳が開きました。「舌のもつれが解けた」。舌がもつれ、別の言い方をすれば、舌が縛られている。舌が束縛されているというか、縛られている状態だったということですね。それが解けた、そして「はっきりと話せるようになった」。つまりこの人ははっきり話すことが出来なかったのです。完全に何も話せなかったってことではないようですね。話すことが出来ないのではない、はっきりと言うことが出来ない、聞いた人がはっきり分かることが出来ない、そういう話し方であったということのようです。はっきり聞くことが出来ず、はっきり話せなかったこの人の耳が開かれ、舌のもつれが解かれ、はっきり話せるようになった。それがこの日のイエス様の奇跡でした。

彼らは、イエス様に言っただけなら命じられたのですけれども、言い広めます。非常に驚いて言うのです。「素晴らしい」、「この方のなさったことは素晴らしい」、「すごい、不思議だ」、「聞こえない人を聞こえるようにした」、「話せない人を話せるようにした、不思議だ」と言って驚いたのです。

このことが私たちにも起こると信じるのでしょうか。そもそも私たちは良く聞こえているのでしょうか。そしてちゃんと話せているのでしょうか。私は、今日、このみ言葉を聞きながら、イエス様がしてくださったことが、今日ここにいる、今日それぞれの場所にいる私たち一人一人にも起こるんだということを信じて、この御言葉を読み、この御言葉を語ろうとしています。

さてもう一度、イエス様との接触、濃厚接触という所に戻って考えてみましょう。人と人が接触するとですね、持っているものが受け渡されるわけです。ですから今、私たちの社会

では、外出を減らしましょう、人の動きを減らし、人と人の接触を減らすということに、限りなく最大限の努力をしましょうということでこの数か月を過ごしてきました。そしてその制限と言いますか、行動変容、行動を変える、最大限変えるということ、それから少し緩めながら、というのが今の状況です。

人と人が接触すると、持っているものが受け渡されます。もしウィルスを持っていれば、それも人から人に渡ります。病気も渡っていきます。移っていきます。「類は友を呼ぶ」ということわざがありますけれども、人と人は接触が多いと似てくるんじゃないかな。互いに影響を受け合っていることはあるでしょう。

IV 誰と触れるか

① ウィルスを持った人との接触の場合

先ほど読んだ2月29日の発信の中に、良いものも悪いものも運び得る、とあったように、その両面があります。では私たちは誰と触れるかということですね。まず一つはウィルスを持った人と触れるとどうなるんだろうということをちょっと考えてみましょう。ウィルスを持った人と接触する。移らないかもしれませんが。でも移るかもしれません。接触したとしても自分が貰わないためにどうしたらよいか、目や口に触れないようにする。そういうことに気をつけて、お互いが、自分が持っているかもしれない、相手がそうかもしれない、そうだととしても、これから会えるようになった時に、会っても移さない、移されないということに気を付け続けていきましょう。ウィルスを持った人との接触の場合です。

② 差別意識や差別行動をする人に触れる場合

二つ目に、もし差別意識や差別を実際にする人、そういう行動をする人と触れたら私たちはどうなるのでしょうか。影響を受けるかもしれません。みんなで見張ろうとか、相互に監視するとか、皆仲間はずれにしようとかってことをし始めると、自分も同じようにしちゃうかな、しなきゃいけないのかなと思ったりしてしまうかもしれません。しかしもし、そういう差別意識とか差別行動を持っている人と触れた場合にも、それを自分の中に取り込まないようにする、ということは大事です。手や口に触れないようにするのと同じように、人の口から出る悪いものに触れたとしても、それを自分の心に入れないようにする。心に入らないように注意を払って、ある意味消毒をする。洗い流したり、無力化したりする。消毒アルコールで部屋や指を消毒するように、私たちは、神様の言葉に触れ、愛に触れて、その悪いものが入ってこないように気をつけながら過ごします。

③ イエス様に触れる

三つ目に、イエス様に触れるとどうなるかということを考えてみましょう。イエス様に触れるとどうなるんでしょうか。イエス様に触れると、イエス様の持っているものがその人に移ります。イエス様の持っているいのちが、愛が、自由が、人のために力を使い時間を使いいのちを使う自由が、触れたその人に移ります。イエス様は耳が開かれています。父の声を、父なる神の声を耳と心でいつも聞いていました。イエス様と触れた人の耳が開かれます。イ

イエスは口を開いて自由に話します。イエスは権威をもって話します。自分の言葉で話します。はっきりと話します。イエス様に触れた人も口が開かれ、舌のもつれ解かれ、はっきりと話せるようになる。そういうことが起こるのです。

この時この人は「はっきり話せるようになった」と書かれています。何を話したのでしょうか。何を言ったかということはここには記されてはいません。でもはっきり言えないその間も、言いたいことがあったのかもしれませんが。思うところがあったのではないのでしょうか。でも言葉にはならなかった。舌に上らなかった。周りの人に伝わっていなかった。周りの人は彼の声を聞いて理解することが出来なかったのかもしれませんが。思っていることがあったとしてもです。

しかし、神様は人間の言葉が舌に上る前に聞き取って下さるお方です。神様は心の思いもすべて読み取られるお方です。詩篇の 139 篇 4 節、2 節にそのことが書いてあります。イエスは神であり、人である方なので、他の人が聞けなかった、この人の言葉にならぬ思いを聞いておられた。読み取っておられたのであろうと思います。そしてこの人に言われました。「開け」。聞こえるようになれ、話せるようになれと。

「開け」と、閉じたその人の耳と口を開いてくださいました。イエスは、神様は、言葉が舌に上る前に聞いてくださるお方です。私たちにも言葉に出来ないことがある。そういうとき、既にイエスは心を聞いてくださっています。この人が何を言ったのかマルコは書いていません。私たちも一人一人神の前に、人の前に、口にできること、出来ない事いろんな思いがあります。イエス様はそのすべてをご存じで、「開け」と言ってくださいます。もしかしたら何十年も心にしまって言わずにいた、そういうこともあるでしょう。主がそれをご存じです。イエス様との接触により、イエス様が手と指で触れてくださったことで、この人は開かれました。はっきり話せるようになりました。そばの人たちも聞いて分かるようになったのです。

私たちにも形は違いますが、同じ奇跡が起こると信じます。今まで聞くことが出来なかったことが、私たちも、イエス様に触れられた時、触れられた後、聞こえるようになってしまう。今まではっきりとは話せなかったことを、イエス様に触れてもらった後、話せるようになってしまう。私たちもこの肉体の耳と口が開いていても、中々本当には人の声が聞けず、神の声を聞けず、自分の心の声を聞けないという状態になることがあります。また神様に、人に、自分に向かって正直に語れないということがあります。そういう私たちも開かれるのです。「開け！」というイエス様のたった一言で開かれるのです。イエス様は「見えるようになれ」と言われる方です。「心が開かれるように」、そして「分かるようになれ」と言われる方です。「信じるようになれ」と言ってくださる。「開け」。それは信仰の目が開かれること、心の目が開かれることです。

ルカの福音書 24 章で、復活後のイエス様が御言葉を説き明かしてくださった時に、イエス様が「心」を開いたと書いてあるんですけど、新共同訳聖書では「心の目を開いて」と言う風になっています。

イエス様が心の目を開いてくださるときに、私たちは見えるようになるのです。イエス様が心の耳を開いてくださるときに、聞こえるようになるのです。神様が目と耳と心を開きます。

V 旧約の時代も今も

旧約聖書の一つの場面を読みたいと思います。預言者エリシャという人の時代です。第二列王記 6 章のところですね。私たち人間は全部が見えているわけではありません。神様が隣にいてくださるときに、また神の軍勢が側にいてくれる時に、人間には見えないことがあるのです。預言者エリシャの時です。第二列王記 6 章の 15 節から 17 節の所です。エリシャは祈って主に願いました。「どうか彼の目を開いて見えるようにしてください」と、エリシャは召使の若者のために祈りました。彼は朝起きると、敵の馬と戦車の軍隊が町を包囲しているのを見たのです。そしてエリシャに言います。「ああ、ご主人様。どうしたらよいのでしょうか」と。敵はこんなにも多く、強い馬もいます。戦車もあります。あんなにたくさんいます。どうしたらよいのでしょうか。どうしようもない、と言っているわけです。そこで 17 節エリシャが祈るとどうなったか。主がその若者の目を開かれたので、彼が見るとなんと「火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちていた」のです。火の馬と戦車、多くの軍勢、敵よりも多く、敵よりも強い。それが見えたのです。この若者には見えていなかった。しかしエリシャは、見えないその存在を知っていた。この若者の目を開いてくださいと祈ると見えるようになったというのです。

私たちには多くの味方がいます。目に見える所にもまた見えないところにも、信仰の先輩たちがいます。この聖書の、旧約聖書、新約聖書の多くの信仰の先輩たちが、私たちを取り巻いています。教会の先輩たちがいます。この 2000 年の教会の、昔の国々の教会の先輩たち、そしてこの私たちの教会の先輩たちがいます。先に世を走り通して、地上の生涯を走り終えて、主のもとに迎えられた人たちが、私たちを見守っています。応援してくれています。私たちは孤独と思うかもしれない。数が少ない、無力だと思うかもしれない。でも見えない味方が応援しているのです。無観客ではなくて、見えないけれど味方がいる。先輩がいる。周りを取り囲み、声をかけてくれる。見えないそういう存在が心の目に見えるようになる。応援してくれる声が聞こえるようになるのです。

エリシャはその後に祈りました。「敵の目をくらませてください」と。彼らは見えなくなって迷い、サマリヤの町に行く。エリシャはまた祈ります。「目を開いてください」。なんと彼らが敵方のサマリヤの町にいることに、アラムのシリア軍勢は気がつきます。7 章 6 節に行きますと、今度は、「聞かせる」ということが起こります。敵アラムの軍勢に、神様は、馬と戦車と軍勢の声を聞かせます。彼らは逃げ去りました。そして、敵の陣地から奪うことが出来たという記事がここにあります。

神さまが目を開き、耳を開きます。神様には閉じることもできるし開くこともできるのです。ですから私たちも、「開け」と言われる、あなた自身を開けと言われる主の声を聞かせ

ていただきます。開かれよ、“be open”とか、“be opened”と言ってくる主の声を聞かせていただきます。私たちはこれからこの時代、正解のない、答えのない、迷い道のような道を、迷路のような道を進んで行くようなものです。でも私たちは孤独ではありません。見守っている人たちがいます。神の民は一つです。そして私たちも聞けるようになるのです。私たちにも奇跡が起こるのです。目には見えないけれども、多くの仲間がいる。今地上に生きている仲間がいる。そして、世を去った先輩たちも私たちを見て、取り囲んで声をかけてくれている。その声が聞こえるようになるのです。私たちの耳は閉ざされていることがあります。神が耳を開くと、聞こえるようになるのです。神が私たちの口を開き、唇のもつれ、舌のもつれを解いてくださると、話せるようになります。

VI 「聞く」と「話す」ことの実践

「聞く」とか「話す」、「聞こえる聞こえない」という話についての具体的なことを二つお話したいと思います。一つはですね、例えばですけどこういうことをよく聞いたことがあります。「No が聞けない」人がいるということ。人が No と言ったのを聞くことが出来ない、相手は断りたいと思っているのだけれど、その No を聞けないで強引に進めてしまうという、No が聞けない人がいる。「No が言えない」って人もいると言うんですね。と言っても中々難しいことがありますけれども、No が言えない人がいる。反対に「Yes を言えない」人がいます。はい私やりますよ、とか、いいですよ、とか Yes を言えない。「Yes を聞けない」人もいるっていうのを読んだことがあります。誰かが協力しますよって言ってくれてるんだけど、その Yes が聞けないみたいなことがある。しかし神さまが私たちの心を開き、耳を開き口を開いてくださるときに、私たちは聞けるようになるのではないのでしょうか。それまで聞けなかった誰かの Yes を、誰かの No を聞けるようになる。そして誰かへの Yes を言えるようになっていく。

「エパタ！」「開け！」とのイエスの様の声を聞くとき、私たちの耳は開け、聞けるようになります。イエス様が「開け」と私たちに言ってくる。この時私たちは、神の声を聞き、身近な人の声を聞けるようになります。そして神さまは私たちの口も開いて、神への讃美を唱え、歌い、神に向かってまた互いに向かって、語ることが出来るようになるのです。神に向かって、お互いに向かって、話すことが出来るようになるのです。

「話す」、「聞く」の実践の二つ目は、エペソの 5 章 19 節、新聖歌の表紙の扉に載っている言葉ですが、「詩と賛美と霊の歌をもって互いに語り合い」とあります。「互いに語り合い、主に向かって心から讃美し、歌いなさい」。私たちは互いに語り合うのです。神様に対して歌いますし、互いに語り合うのです。私たちのお互いの心と耳と口が開かれるときに、互いに語り合うことが出来るようになります。例えば、祈り会の交わり、小グループの交わり、礼拝後の交わりなどなどの場で、私たちはお互いの声を聞く。お互いに対して、自分の状況について話す。「私はこんなことを祈っているんだ」と話す。「こんなことを心配しているのです、一緒に祈って下さい」と伝える。そういうような交わりですね。互いに語り合うこと、いろいろお互いに話をするやり方は、変えなければならぬこともあるでしょう。しかしや

っぱり大事なことです。顔を合わせて会うこと、感染に気をつけながら会うこと、気をつけながら互いに話し、聞くこと。その当たり前のこと、普通のこと、大事なことをこれからも大事にしましょう。形を変えなければならないことがあるでしょう。形を変えて大事なことを失わずに大切にしていきましょう。神が目を開き、耳を開いてくださいます。神には閉じることも開くこともできます。ですから「あなた自身を開け」と言われる主の声を聞きましょう。

この後に歌う讃美は、新聖歌の 38 番「わが目を開きて」と言う歌です。今日は全部を歌えませんが、今は歌う時間を短くするために、この中の一節だけを歌うように、一部分だけを歌うようにしています。

今日は最後の第 3 節を歌います。第 1 節、第 2 節の歌詞を読みます。

1 我が目を開きて さやに見せ給え 今まで知らざりし ^{みふみ} 聖書の^{まこと} 眞実を

(折り返し) 我今静かに 我が主を待つなり 主よ与え給え 悟りを

2 ^{にぶ} 鈍き耳なれど 声をかけ給え ただ主の御言葉に 従いまつらなん

3 節、主よ我が唇 解きて歌わしめ これは皆さんと共に歌いたいと思います。

VII 最後の祈り

お祈りをささげましょう。

イエス様。あなたが「開け」と言ってくださいます。私たちの耳を開いてください。私たちの舌を解き、口を開いてください。私たちがあなたの声を聞き、「エパタ」「開け」と言ってくださるあなたの声を聞いて、耳も口も心も開かれることが出来ますように。あなたとの交わり、一人になってあなたの前に出る時、そして皆で集まってあなたの前に出る時、その両方の時を大切にしていけることが出来ますように。あなたへの讃美を歌わせてください。主イエスキリストの御名によってお祈りします。 アーメン